

山形略記
全

339
102

LCC
201

023601-000-5

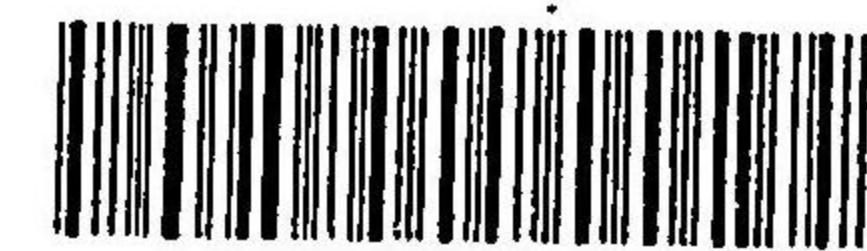
339-102

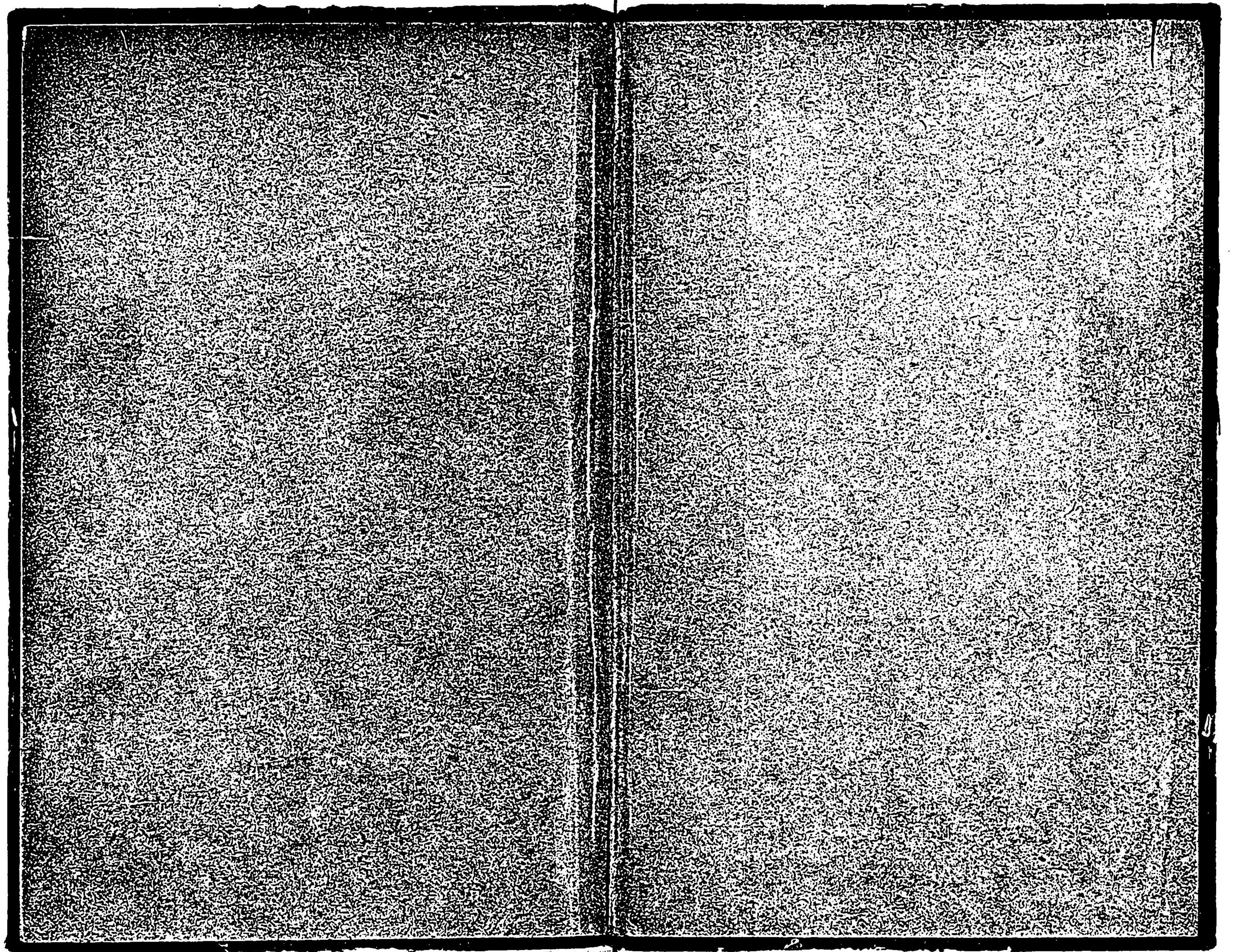
山形略記

渡辺 徳太郎 / 著

M45

ADC-0581





339
102

山形略記 全

例言

西村竹園

本編は昔の山形を知るにつけ語るにつけ必要なる主要の事實を擧
 るを主とし、勉めて文飾を避け、只管他府縣より來遊の士、又は今の青
 年子女の爲めに山形發達の因由を簡明に紹介するの趣旨を以て思ひ
 出づるに任せ録せるなり

一、本編山形畧記と名は、而かも他地方に渉る處あり、是れ彼是相比較して、
 山形なる概念を切明かならしめんと欲する爲めのみ

一、匆卒の編、記事序なく且つ有無輕重を免かれざるを恐る、覽る人許し給
 ひてよ

明治四十五年七月

忍我 渡邊生識



山形略記

山形縣は地勢上より大要三方面に區分さる即ち庄内、置賜、及び村山地方とす而して新庄は猿羽峠さるはねに依り村山地方より區別され別に一區劃をなせども交通、沿革及び言語の上より寧ろ村山に聯屬すと云ふべし

鶴岡(庄内藩酒井家十二萬石)は庄内の中心、米澤(米澤藩上杉家十五萬石)は置賜の中心、

新庄(新庄藩戸澤家六萬八千三百石)は現今稱ふる最上郡の中心而して山形(山形藩水野家五萬石)は村山地方の中心たり

酒井、上杉及び戸澤は各其地方一圓に涉り領知たること久しければ自然藩風の普及確立せるものあれども村山地方は小藩(上ノ山藩松平二萬七千石、山形藩水野五萬石、天童藩織田一萬八千石、長瀨藩米津一萬千石、佐倉堀田分領四萬石、館林秋元分領四萬八千石、館松前分領三萬石、土浦土屋分領一萬三千石、棚倉阿部分領八千石、旗本高力領三千石)分裂し各其領域に據り且つ藩主の交代頻繁なりしものありたる結果、大藩の地に見るか如き統

一的勢力を欠きたりき然れども廢藩後自然合一の狀勢を成せり。近く人材養成を目的とする村山同郷會(自四十五年度至五十年年度繼續縣補助費總額一萬五千圓)なるもの組織されたるか如き亦其一端として見ることを得へし

山形は往昔最上と稱し山縣又山方に作らる鎌倉時代金井の莊とも云ひり、最上は古の出羽國最上郡最上郷の要衝たりしに因る又山縣は山の縣あかたの意又山方は最上郡の南方山隈に偏するを以て山方やまかたと云ひりと或は又今の上の山を上の山方と云ひ此地を下の山方と呼ひたりしを中世に至り下の山方を専ら山方と稱せりとも傳ふ不詳、後世、山形に作る、金井かねいの莊は市内宮町吉事宮(鳥海月山兩所神社)境内に現存する、古井かみな金井の名に本くと稱す、普通には單に山形又は最上の山形と稱へ來れり、天平年間大野東人此地に創て城きたるに起因すと傳ふれとも定かならず、其慥なるは延文元年斯波兼頼奥州大崎より此地に入部せるに基く、子孫最上を氏とす、兼頼より十一代出羽守最上義光よしひかり近郡の諸家を削夷し豊臣家天下一統の際所領を安堵、徳川氏に至り更に庄内三郡由利一圓を賜はる、時人最上百萬石と稱す、

山形は當時最上領の治府として全盛を極む、此故に後世の市人義光を以て山形中興の祖となす、明治四十六年は慶長十九義光没(時年六十九)後三百年に相當す、依て有志新に其墳塋(市内三日町光禪寺)を改修し山形市亦市祭として記念祭舉行の計畫あり、既にして最上家三代(義光、家親、義俊)相續、偶家老爭論あり將軍秀忠の聽に達し元和八年改易山形城以下二十五ヶ所の城地五十七萬石收公せられ更に近江三河兩國內にて一萬石給はる、義俊は高家衆に列せられ江戸屋敷に居住せり

元和八鳥居忠政(二十萬石)山形に封せらる、大に山形城を擴張し市區を改め又馬見ヶ崎川(當時市内を貫流し屢水害を被る)を今の位置に移し市の規模を一變す二代信州高遠に轉す又、寛永十三保科正之(二十萬石)信州高遠より移封、力を殖産興業に注ぎ漆樹栽培を奨勵す居城八年會津若松に移る其後、寛永二十幕料となる、正保元松平大和守直基(十五萬石)越前大野より轉封慶安元播州姫路に移る、慶安元松平下總守忠弘(十五萬石)播州姫路より轉封居城二十年宇都宮に轉す、寛文八奥平美作守昌能(九萬石)野州宇都宮より來り二代

宇都宮に復歸、貞享二堀田下總守正伸(十萬石)野州古賀より移封居城二年福嶋に轉、同三松平大和守直矩(十萬石)豊後日田より來り元祿五白河に移、元祿五松平下總守忠雅(忠弘の孫、十萬石)白河より入り全十三年備後福山に轉、元祿十三堀田伊豆守正虎(十萬石)福嶋より來り居城三代四十七年下總佐倉に轉、延享三松平和泉守乘祐(六萬石)佐倉より來り明和元三河西尾に移、明和元復幕料、同四秋元涼朝(六萬石)武州川越より入る藩臣の邸宅なし急に土工を起し長家を建築す、今の香澄町の長屋是なり又蘭草を移植、疊表、莫蔭の製造を擴む、居城四代上州館林に移。弘化三水野越前守忠精(五萬石)遠州濱松より轉封之を領し明治に入る、明治三廢藩、水野家近江朝日山に移る、最上家より水野氏に至る間、所領交替十五回、席殆んど温なる暇なく藩勢不揚亦不無理矣

明治戊辰の際、藩主東京に在り道路梗塞し藩臣主命を受くるに由なし依て家老水野元宣(通稱三郎右衛門)一藩を主裁す、初め官軍の命を受け庄内征討に應援せるか後奥羽同盟に加はり會津庄内二藩を援く、後謝罪開居けられ元宣は主裁の故を以て其家を没し且つ戮せら

る(時年二十七、後年家名再興、罪跡消滅の特赦に遇ふ)山形市兵燹の危を免かる蓋し元宣の犠牲に因る、市人其赤誠に感ず、於茲明治三十五年元宣の銅像を香澄町豊烈神社(忠精、忠政、忠邦合祀)境内に建設し永く其の徳に酬ゆ

明治三年廢藩置縣、九年置縣、鶴岡、山形の三縣を合し縣廳を山形に置く、時の縣令三嶋通庸氏盛に土木を起し交通を開き教育、殖産を奨励す舊体一變、百事面目を改む、爾來縣下行政上の中心として市況漸く繁盛に赴く、十一年師範學校創立、十四年秋聖上陛下行幸あらせらる

十七年中學校創立、二十二年市制施行、全年裁判所今の地に移る、二十三年馬見ヶ崎川大洪水(北部浸水千四百戸)、二十七年南部大火(焼失千三百戸)、三十年歩兵第三十二聯隊仙臺より移營、三十四年鐵道開通、全年物産陳列場設置、四十年電話架設、四十一年秋皇太子殿下行啓あらせらる

馬淵知事縣記念事業として圖書館(四十二年五月開館)、養徳園(全年十月開園)、模範林

六
（四十二年より六十四年まで繼續殖林）を興す、四十二年歩兵第二十五旅團司令部設置、全年農事試験場漆山村より移轉、四十四年專賣局煙草製造所起工等あり市大に發達す、然るに四十四年五月八日北部大火（縣廳其他官公衙學校會社等十數ヶ所及民家千三百戸焼失）又全月南部大火（焼失百二十戸）損害不尠、然れども市勢之か爲めに挫折せられず、市區改正せられ道路亦幅員を擴む、罹災民家漸次舊に復し諸公衙工成るの曉、市況更に面目を一新すへし舊時山形の商賈は奥羽の商權を握り古く東北の近江商人と稱せらる、主なる物産は紅花（山形附近）、青苧（山の邊附近）、及び煙草（東根附近）とす之を最上の三草と稱せり、紅花は京都に送られ染料に使用す、主として山形商人、一部越中富山賣藥商に依り輸出されり、青苧は一は越後に送られ小千谷縮の原料に一は江州八幡に送り蚊張地の原料に供されたり、山形の商人は紅花と青苧とを京坂に上せ其賣土代を以て日用品（臘、綿、砂糖、鹽、油、古着等）に替へ之を大廻り（瀬戸内より馬關を經、日本海を航し酒田に至る）をなし酒田より最上川を上せ山形を中心として奥羽諸國に供給せり、維新後交通開け山形を經由する必要なきに

至り山形の商業一時衰頽の原因をなす、最上川は貞觀年間慈覺大師此川の三難所を開き初て舟楫の便を通し後に河村瑞賢徳川氏の命を奉し更に最上川の開鑿に盡せしこと、此地に紅花、青苧の二大特産物ありしこと、相俟て山形の商業を奥羽に覇たらしむるに與て力ありしなり

古來世に知られたる名士を擧ぐれば米澤に鷹山公（明君）、黒井半四郎（利用厚生）、荏戸太華（經世家）、細井平州（儒臣）、直江兼續（文武兩道）、小嶋辰三郎（假名雲井龍雄、勤王家）あり庄内に酒井忠徳（名君）、北楯大學之助（最上義光に仕へ大學堰を開鑿す）、清川八郎正明（勤王家）、阿部千萬多（勤王家）、本間久四郎（富豪）あり。新庄に安嶋直圓（算學家關流中興の祖）、北條角磨（育英）土肥祐信（爲政家）あり。而して村山方面よりは最上義光（武將）、會田算左衛門（算學家最上流の祖）、最上徳内（楯岡産、蝦夷樺太探險憂國家）、高梨愚春（楯岡産俳諧師號一具）吉田大八守隆（天童藩勤王家）、金子與三郎清邦（上ノ山藩幕末志士）を出せり次に故事傳説逸話の著名なるものを擧ぐべし

○阿古耶松由來 二説あり

八

一、阿古耶姫は右大臣藤原豊成の息女なり一歳豊成罪ありて遠流に處せらる、家臣姫を奉し其の生國出羽國に通れ來り千歳山の南麓平清水に隠る、姫世を厭ひ遂に病没す、家臣遺言を守り山上に葬り松を植へ墓標となす、後世之を阿古耶の松と稱ふ傍に辭世を刻せる石を立つ、此石何時の頃にや轉落せり今北麓、萬松寺内に之を建つ

二、奥州信夫の郡司藤原中納言豊充の一女阿古耶姫、容色艶麗なり詩歌管絃の道に長す或時縁の衣を着ける狀貌秀偉の壯夫來り訪ね慰懃を通す、情次第に濃なり、一夜壯夫愁然として言ふて曰く、實は吾は千歳山に住む松の靈なり、今我幹伐られんとす今より後復た相逢ふを得ざらん、吾若し死なば只郷の導引を希ふのみと互に哀別離苦の情に堪えず言ひ終りて壯夫の姿忽焉として消ゆ、當時陸奥名取川橋修理の擧あり廣く其梁材に適するものを尋む、千歳山の古松を措て他に乏なしとて之を伐りしも衆力之を動かす能はず、阿古耶之を耳にし深く感悟する處あり、乃ち往て之を導引す、松材初

めて運搬に就く、姫是より山の頂上なる此松の樹根に菴を結び永く松の靈を祀る、慶雲四年没後遺命により其場所に二松樹を植へ墓標とす阿古耶松の名之に由ると明治十三年の頃千歳山大日如來祭日當日火を失し山火事となり阿古耶松亦焼失す今其の焼株を遺すのみ、明治四十一年 東宮殿下巡啓記念とし第二の阿古耶松として萬松寺内に一稚松を栽ゆ

○出羽の語原 はしたかのいではの國、はしたかは出羽の國の枕詞、鶯鷹なり、而して出羽は語原三説あり

一、古へ出庭臣あり庄内地方を治む其の治化を享けたる地なれば名く、羽黒山(伊氏波社)は出庭臣の祖廟なりと

二、上古、鶯鷹の羽を朝廷に貢し用ゐて箭羽となせり羽を出したる國なれば出羽國と名けたりと

三、出羽は出端(いは)なり越後、陸奥二國を割きて置きたる國なれば越後陸奥よりはみでたる

國と云ふ意もて出端の國と云ひるなりと

○山寺獅子舞の起原

ヤマテ

山寺は東村山郡山寺村にあり、山形より三里十一丁、道路平坦、

天台の第二祖慈覺大師の入定地、又全山奇巖怪石松杉鬱蒼、天下無双の奇勝たり貞觀二年慈覺大師清和天皇の勅許を蒙り開山せるに創まる、一寺を起す立石寺と云ふ山にある寺なれば一に山寺と稱ふ、大師此地に入るに先ち伴次、伴三郎なる兄弟二人の獵師あり猴猪を獵し業とす大師殺生戒を説く遂に大師に歸依し弟子となる、是より一山の猪初めて心安きを得、猪喜ひ多く集へ來り相舞ふて大師の恩徳を頌せるに起因すと傳ふ、毎年舊四月の中の猿の日を以て大祭執行、獅子舞出つ、宮城縣宮城郡愛子街道奥に蕃山と云ふ一山あり往昔此處に蕃次、蕃三郎なる兄弟二人の強盜棲息せりと傳ふと聞けり而して元、山寺愛子は山形仙台間を通する二口越の國道に當る、依て考ふるに兄弟二人は入て山寺に獵を業とし出て仙台領に掠奪せるものか、山寺には兄弟の棲息せりと傳ふる伴次岩あり又五大堂下の岩岫中に伴三郎發心の木像を安置す

山寺の風光絶佳、四時趣を異にす就中秋景を最となす東北の耶馬溪と稱ひられ又榛名、妙義に比す明治四十一年 東宮殿下行啓あらせられてより其名天下に響く東北一の靈地奇勝として旅客の探勝禁する能はさる所なり縣下の有志、行啓記念として山寺保硯會を組織し一山の保存を計る、明治四十六年は慈覺大師入定千五十年に相當す記念大祭舉行の計劃あり

○實方中將遺跡

一條天皇の御宇、藤原實方朝臣、藤原行成と事を争ひ勅勘を蒙り陸奥

の歌枕見て參れとて陸奥守に貶せられ陸奥に下り名勝古蹟を遍歴し遂に阿古耶松の出羽にあることを聞き到らんとして途上名取郡笠嶋の里にて馬より落ち遂に斃す、聖旨を奉し未だ意を果さず憾限りなし死後千歲山に葬らるれば以て瞑すへしと、從者遺命に従ひ遺骸を奉し千歲山上に葬むる、實方の女中將姫亦遙々尋ね來り父の墳墓に留まり日夕香花を供す遂に此地に終ると傳ふ定かならず兩墳墓共に萬松寺にあり

○炭燒藤太傳説

炭燒藤太は承安年中鞍馬山より奥州に逃れ來れる源義經に同伴せる金

賈吉次、吉六の父にて今の東村山郡寶澤村に住せりと傳ふ藤太或日鳥海月山兩所宮に參詣し山より掘出せる銅を社の脇なる井戸にて洗ひ兩所宮に奉りしとなり是より此井を金井と云ひ此井戸ある地なれば此地(山形)を金井庄かねいのと云ひりとかや兩所宮は又武門吉事宮とも稱ふ義經吉次に命し社殿を改築せしめたるより世人誤り傳ひ吉次宮と稱ふる者あるに至れり實は康平年間源賴義陸奥六郡を平定し凱旋の歸途、遙に飽海郡吹浦より勸請し社殿建築、國家泰平武門吉事宮と稱せるに因る

○おいまの方縁起 豊臣秀次九戸豊政亂追討の歸路、山形城に滞留す最上義光其の息女駒姫(歳十五、後お今の方)を侍せしむ秀次駒姫を所望す、もだし難く遂に京師に送り遣はす、未だ對面さへなきに秀次高野に追はれ、秀吉秀次の寵姫三十六人を三條川原(京都瑞泉寺縁起に據る)に切らしむ、お今の方、亦其の内に加はる、義光悲嘆一方ならず是より義光秀吉を怨み家康に與す、又專稱寺を高橋村より山形に移營し駒姫の菩提を吊ふ、書院庫裡は慶長年間、本堂は元祿十三年の建築に係る、明治四十四年五月山形市北

部大火後假縣廳舎に充てらる家賃一ヶ月百圓なりと聞く

○霞ヶ城名の起原 元大山城、又山形城とも稱せり後、霞ヶ城と云ふ大野東人の創築に係ると傳ふ、斯波兼頼之を修築し最上家代々の居城たり今歩兵第三十二聯隊の營所に充てらる、最上義光の息女駒姫秀吉の爲めに殺されてより義光秀吉を怨み家康に與す關ヶ原役(慶長五年十月)起るに當り上杉景勝の臣直江山城守兼續米澤より萩の中山、畑谷を経て山形城を侵さんとし戸上山より山形城を瞰視せしも城霞に掩はれて見えざりしかば是より霞ヶ城と稱せりと云ふ、戸上山とは兼續此上山より十日の間山形城を窺ひるより十日見山と云ひりと傳ふ山形より西南の方向に見ゆ、義光伊達政宗(政宗は義光の姉の息なれば義光と政宗とは叔父甥の關係に當る)の援を乞ひ長谷堂、上ノ山等に迎戦しけるか關ヶ原の敗報至るに及び兼續兵を收めて去る義光政宗と共に之を追撃し近傍の諸城を取る家康其の功を賞し義光を従四位上左近衛權少將出羽守に任す

○紅花逸話及傳説 紅花は最上の名産として古く天下に其の名を博す、産地は村山四郡

に涉り山々谷々に至るまで皆之を作る天童、灰塚、成安村附近最も多く産し且つ品質優良なり寒河江、山形之に次けり六月、花を摘み花餅に製し紅の原料となす朝東雲より露の乾かざる間に之を摘み、摘みたる花を水桶に浸し黄氣を揉出し後蒸籠に均し二夜寝せたるものを一寸九さ程の薄き花餅に作り花筵に並べ之を乾燥するなり之を干し花と云ふ九貫目を包み一本と稱ふ、主として京都、大坂に送れり花摘み、花染、花寝せの折男女紅花歌を歌ひ非常に賑ひるものなりと云ふ毎年一月十日の初市に市神に供ふる盛飴は花餅を筵に並べ干したる有様を形取れるものなり今は化學染料の爲めに壓倒され栽培跡を絶つに至れり今逸話傳説の一二を擧ぐ

一、紅花は収益多き作物なりき、此地より或者奈良大佛に詣てる際「お前は何處の國から来たかは知らぬか大佛様は大いてはないか、鼻の穴に笠を被つて人が這入れる」と云ひるに對し「ワシは最上の者だが最上には此より大きなハナがある、ハナの中に豆を二俵も三俵も蒔て取る」と返答せりと夫れは元來、紅花の畠は二作にて紅花の種は春

蒔かれ六月花を摘む然るに其の紅花の脇には皆豆を蒔き此豆、花刈の時節には七八寸位に生長し秋季に入り豆を收む故に花(紅花のこと)の畠の中より豆を幾俵とも取りたりと云ひに由る

二、文録頃の事、山形十日町に紅屋吉兵衛と云ふ商人ありけり、在々より干し花を買集め年々京坂地方に登せ行き之を賣る、適々京都三條通り紅間屋藤右衛門の娘と契を結び國に歸る、婚未だ成らざるに不幸にして其の娘病死す、娘の父母之を悲み、其の冥福を祈らん爲め巡禮者となり普く靈場に參拜し且つ山形に到り娘病死の事を吉兵衛に告げんと欲せしも老衰の身如何とも其の意の果し得ざるを悲む、藤右衛門の義僕六助なるものあり、其の情を憐み、代て行かんことを請ふ、六助遂に廻國巡禮を果し山形に來り紅屋吉兵衛を訪ふ、何んぞ圖らん前に病死したりし主人の娘、既に吉兵衛の妻となり出て、應接し互に相語る間に忽焉として消え終らんとは、六助深く感ずる所あり、碑を建て懇に供養を營む、此碑今尙城南練兵場の西にあり、文祿五年五月十三日

僕六助の文字を刻む、世人之を靈石と云ふ又十日町口より此碑に達する道路を靈道小路と稱す

終に著名なる歌謠を擧ぐれば

一、阿古耶の松の古歌

陸奥の阿古耶の松に木かくれて

出つへき月の出てやらぬかな

(夫木集)

一、最上川の古歌

最上川のぼれはくだる稻舟の

いなにはあらずこの月ばかり

(古今集)

一、芭蕉翁山寺の句

しづかさや岩にしみ入る蟬の聲

(奥の細道)

一、芭蕉翁最上川の句

五月雨をあつめて早し最上川

(全上)

一、紅花摘み唄

明けぬ内から畑邊に行きて

見れば美しくし花明り

一、紅花染唄

花の六月二度あるならば

枯れた枝にも花か咲く

一、最上で上の山の俗謠

出羽で庄内、最上で上の山、こゝは會津の東山

一、目出度くの唄

(祝事其酣手拍子を打ち一座にて必らず謠ふ)

目出度くの若松様よ

枝も榮ゆる葉も茂げる

一、芭蕉翁紅花の句

行末は誰が肌ふれん紅の花

眉掃を面影にして紅の花

一、紅花の古歌

人しれず思へはくるし紅の

すえつむ花の色にいでなむ

(古今集)

よそのみにみつゝや戀む

紅の未摘花の色にいですとも

(萬葉集)

なつかしき色ともなしに何にこの

未摘花を袖に觸れけん

(源氏未摘花)

山形年表

| 名 | 稱 | 事 | 項 | 明治四十五年迄 |
|--------|---|--------------------------|---|---------|
| 阿古耶姫 | | 文武天皇慶雲四年逝去 | | 千二百六年 |
| 出羽國 | | 元明天皇和銅五年九月越國より割き建國 | | 千二百一年 |
| 最上の郡 | | 全年十月陸奥より最上、置賜を割き出羽に屬 | | 千二百一年 |
| 大野東人 | | 天平九年陸奥賀美郡より最上郡玉野に至り山形に築城 | | 千七百七十六年 |
| 國分寺薬師堂 | | 天平十三年行基奉勅建立 | | 千七百七十二年 |
| 慈覺大師 | | 貞觀六年山寺にて入定 | | 千四十九年 |
| 村山の郡 | | 光孝天皇仁和二年最上郡を分ち村山、最上とす | | 千二十七 |
| 實方中將 | | 一條院長徳四年逝去 | | 九百十五年 |
| 縣社八幡神社 | | (大野東人勸請)康平六年正月十九日源頼義改築 | | 八百五十年 |

| | | | |
|------------|---------------------|----------------|--------|
| 鳥海 月山 | 兩所神社 | 康平六年正月十八日源賴義勸請 | 八百五十年 |
| 炭燒 藤太 | 二條天皇承安年間 | | 約七百四十年 |
| 斯波 兼賴 | 延文元年山形入部 | | 五百五十四年 |
| 光 明寺 | 永和元年斯波兼賴開基(兼賴木像あり) | | 五百三十八年 |
| 專 稱寺 | 慶長元平最上義光高櫛村より移營 | | 三百十七年 |
| 最上 義光 | 慶長十九年一月十八日卒去 | | 二百九十九年 |
| 鳥居 忠政 | 元和八年山形入部 | | 二百九十一年 |
| 和右衛門 火事 | 文政四年五月七日町より出火北部大半焼失 | | 九十四年 |
| 羽前 國 | 明治元年十二月出羽を分ち羽前、羽後とす | | 四十五年 |
| 山形 縣 | 明治三年山形藩を廢し山形縣を置く | | 四十三年 |
| 山形 市 | 明治二十二年市制施行 | | 二十四年 |

明治十五年七月廿四日印刷
 明治十五年七月廿五日發行
 (非賣品)
 著者 渡邊德太郎
山形市旅籠町四八六
 印刷者 五十嵐太右衛門
山形市七日町五一六
 印刷所 山形酒版社
山形市七日町新道

| |
|-----|
| 309 |
| 102 |

1889
102

